

関西学院大学 研究成果報告

2025 年 5 月 27 日

関西学院大学 学長殿

所属：文学部
職名：教授
氏名：荒山正彦

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	☒ 特別研究期間 ☐ 自由研究期間 ☐ 大学共同研究 ☐ 個人特別研究費 ☐ 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	長野県における名勝風景地の研究
研究実施場所	長野県、東京都、英国、自宅ならびに個人研究室ほか
研究期間	2024 年 4 月 1 日 ～ 2025 年 3 月 31 日 (12 ヶ月)

◆ 研究成果概要 (2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

■ はじめに

これまでの研究において、日本を含む各地における近代期の旅行の文化史をテーマとし、旅行の目的地となる名勝、歴史的まちなみ、そして歴史文化遺産などの風景地をとりあげてきた。こうした従来の研究を踏まえて、2024年度特別研究期間における研究テーマを「名勝風景地」とした。

また、1927（昭和2）年に実施された名勝風景地のイベント「日本新八景選定」（東京日日新聞・大阪毎日新聞）において、ローカルな活動が最も多くみられたのが長野県であったため、具体的な調査地として長野県を選び、合わせて各地のフィールドにも目配りをし研究をすすめることとした。

特別研究期間のおよそ1年間における研究は、当初の予定よりも多岐に渡った。上述の「日本新八景選定」をさらに掘り下げることから、長野県内において以前調査をした「雪形」に関する資料収集、さらには日本を代表する名勝風景地というべき富士山とその山麓でのフィールドワークと資料収集、そして特別研究期間を有効に活用し、英国での風景地のフィールドワークも行った。

そこで本研究概要報告においては、まず長野県内における名勝風景地の調査概要を記し、次に長野県内における残雪絵模様「雪形」に関する調査の概要、そして富士山と英国でのフィールドワークについても付記したいと考える。

■ 長野県内における名勝風景地の調査

まずは、近代期における名勝風景地をリストアップするため、これまでに収集した戦前期の旅行案内書と旅行印刷物、ならびにあらたに発見した旅行案内書と旅行印刷物を調査資料とした。取り上げた主な資料は刊行年代順に、『内国旅行日本名所図絵』（1889・明治22年）、『全国鉄道賃金名所旧跡案内』（1894・明治27年）、『東海東山畿内山陽漫遊案内』（1894・明治27年）、『日本名勝地誌』（1895・明治28年）、『日本全国鉄道名所案内』（1898・明治31年）、『増補千山萬水』（1902・明治35年）、『鉄道作業局線路案内』（1905・明治38年）、『信州案内』（1908・明治41年）、『日本漫遊案内』（1909・明治42年）、『鉄道院線沿道遊覧地案内』（1909・明治42年）、『遊覧地案内』（1912・明治45年）、『鉄道旅行案内』（1915・大正4年、1917・大正6年、1921・大正10年、1936・昭和11年）、『新式鉄道旅行地図』（1930・昭和5年）、『日本案内記中部篇』（1931・昭和6年）、『旅程と費用概算』（1935・昭和10年）、『ツーリスト案内叢書第6輯』（1936・昭和11年）、および吉田初三郎や金子常光による鳥瞰図、ポストカード、各種リーフレットほかである。

また1927（昭和2）年に行われた「日本新八景選定」のイベントにおいて、長野県内で組織的集票活動がみられた風景地のリストアップ、明治期末からはじめられた史跡名勝天然記念物調査の候補地リストなどを作成し、近代期における名勝風景地を一覧した。

他方で、近代期における名勝風景地を通時的に考察するために、戦後期から現代にいたる長野県内各地の観光に関わるパンフレット、リーフレット類の収集を行った。

以上の資料整理と分析はこれからの課題として残されている。

■ 長野県内における残雪絵模様「雪形」に関する調査

雪形は、4月から5月にかけて、北アルプスなどの山々に現れる残雪の絵模様で、山名の由来や農事暦、季節の移り変わりを知らせるものとして認識されてきた。こうした雪形の実態を、

1990年代に長野県内において調査し、当時編纂中の『長野県史民俗篇』への資料提供や、論文等の発表を行ってきた。今回の特別研究期間における調査の一環として、2024年4月から5月にかけて雪形に関する追跡調査を行った。

山麓から確認できる雪形そのものに大きな変化は認められないが、山麓での「伝承」には変化がみられた。長野県内の雪形をまとめた長野県公式サイト「GoNAGANO」や「とっておき信州」では、雪形そのものの説明に加えて、白馬五竜岳の武田菱、白馬岳の代掻き馬、爺ヶ岳の種まき爺さん、常念岳の常念坊、鹿島槍ヶ岳の鶴と獅子、蝶ヶ岳の蝶など、北アルプスにみられる雪形の詳細な説明がみられる。

また大町市観光協会では2000年代から「北アルプス雪形まつり」を開催しており、雪形を題材とした詩や短歌、絵画、写真などを一般から募集し、文化会館や図書館などでの作品紹介が行われ、一般市民への伝承活動が継続されている。安曇野市においても市のウェブサイト上には「雪形」のページが設けられ、安曇野市内から眺めることのできる雪形がイラスト入りで解説されている。中央アルプスの雪形を眺める伊那谷においても、行政機関や観光機関が運営するウェブサイト上において雪形の紹介はみられる。大町山岳博物館や長野県内いくつかの「道の駅」においては、雪形を紹介するパネルの設置、広報誌での紹介などもみられた。このようなウェブサイトでの紹介と、山麓各地でのイベントは30年前にはなかったものである。雪形を地域の伝統的な文化資源として保存活用する動きがこの30年間に増えてきたといえよう。

雪形は季節の風物詩として、4月から5月にかけて、各地のローカルな新聞においても取り上げられることが多い。1990年代の新聞調査においても各種の雪形が報じられていたが、およそ30年後の2020年代においてもほぼ毎年の慣例として、雪形の出現が報じられている。雪形に関する新聞報道を遡り、時系列の年表と一覧を作成するのは今後の課題である。

なお、地元の造園業社などへの聞き取りでは、季節の移り変わりを示す指標として認識されていることがわかった。しかしながら、いくつかの代表的な雪形が「伝承」されている一方で、比較的地味なものは紹介される機会が少なくなり、相対的に民俗事象としての雪形伝承そのものはなくなりつつあることを確認した。

■ 富士山と英国における名勝風景地の調査

近世においてとりわけ江戸庶民による登拝が盛んに行われた富士山が、明治期の近代を迎えて、どのような名勝へ、あるいは風景地へと移り変わったか、たいへんに興味深い課題であると実感した。特別研究期間の2024年度に初めて資料収集を行ったため、研究成果へと結びつくのはまだ先のことであるが、旧来の登山口が明治期以降に再編成され、あらたな登山口の整備や、鉄道の開業に伴う富士山イメージの変遷、写真や絵画の対象としての富士山の見方や眺め方の発見、山麓「富士五湖」の誕生など、興味深い課題を発見することができた。

英国でのフィールドワークを6月後半の2週間に渡って行った。特別研究期間の課題としての調査は6月23日から29日までの約1週間で、旅行とのかかわりで整備がすすんだ歴史的なまちなみ保存、建造物や田園風景などの歴史遺産保存の現場、そして近代以降に盛んになる風景づくり（とりわけガーデニング）の歴史について、現地見学を軸に資料収集を行うことができた。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。